



『〈シリーズ ケアをひらく〉 コードの世界 手話の文化と声の文化』

評者・中根 直子 日本赤十字社医療センター

「**コ**ード」とは、聞こえない親を持つ聞こえる子どもたち (Children of Deaf Adults) のことである。この本は、聞こえない文化で育った子どもたちが、聞こえる社会とどのように向き合っているかを、社会学の研究者である著者が明らかにしようと試みた軌跡である。

人の五感のうち、情報伝達にかかわるのは「視覚」が83%、「聴覚」が11%を占めるという。触覚・嗅覚・味覚は合わせて5%程度であり、言語的コミュニケーションに関して、それを左右するほどの影響力はないとも言われる。しかし、これは五感のすべてを持っているのが前提

である。もともと「聴覚」を持たない人にとってみれば「視覚」がほぼすべてになるだろう。

著者は「手話は異なる言語である」という認識を示している。手話のコミュニケーションでは、必要な情報を視覚的に伝達することが最優先されるというのだ。聴覚を持つ者の言語は、たとえ文書でも「声を聞く」という、音声を前提とした文脈を含んでいると看破する。なるほど……。私もろう者のグループと電車に乗り合わせたことを思い出す。騒々しい車内は全く彼らの障害にならず、一般乗客の肩越しに「賑やかな」コミュニケーションが成立していた。手話と豊かな表情がセットで、ドラマチック。著者の言う、情報の送り手の感情とは別の「文脈としての表情」である。そして、聞こえる日本

「手話の文化」と「音声の文化」の違いを楽しむ1冊



澁谷 智子 著
定価 2100 円 (本体 2000 円 + 税 5%)
A 5 判 / 医学書院 / 2009 年

人にとって、それは気恥ずかしさを伴う異文化だ。

コードたちは幼い頃から親とコミュニケーションを図るために、視覚を重視していくことを体験的に学ぶ。親と目が合ってから泣き出す、親と向き合ってから怒り出すなど、子どもながらに聞こえることを前提としない表現手段を身につけていく。一方で、聞こえる世界との距離の取り方は、決して親から学べない。そればかりか、親や周囲からは「通訳」として期待されがちだ。

10 年ほど前「コードの会」ができ、同じ背景の仲間と出会ったコードたちはあっという間

に旧知のような関係となる。「目を合わせずに話すことに不安感」を持ち、ちょっとした不在時も「自分の居場所を具体的に伝える」ことが当たり前であるといった、聞こえる者には不自然な行動も、親と同じ関係性で育ったコードには共通なのだ。彼らの経験と丹念に寄り添う著者の分析力は、聞こえる私たちにも、コードたちのアイデンティティ再発見の過程をありありとガイドしてくれる。

ある者にとっては十分な情報が、ある者にとっては歯がゆく不十分なものとなる。そもそも前提となる五感が共通でない場合、お互いの理解はどう進むのか。胎児や新生児にとって外界とはどんな世界なのか、そんなことをふと考えさせられた。